

令和7年度秋田県政策評価委員会研究評価専門委員会 議事要旨

1 日 時

令和7年8月28日（木）午前10時～午前11時50分

2 会 場

秋田県議会棟 1階 大会議室

3 出席者

研究評価専門委員会 委員（五十音順）

青山亜起菜 株式会社青山精工代表取締役

安藤 大輔 株式会社安藤醸造代表取締役社長

池本 敦 秋田大学教育文化学部地域文化学科教授

大浦 典子 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構
東北農業研究センター 研究推進部長

寺境 光俊 秋田大学大学院理工学研究科・研究科長

高田 克彦 秋田県立大学木材高度加工研究所長

中沢 伸重 秋田県立大学生物資源科学部応用生物科学科教授

宮田 直幸 秋田県立大学生物資源科学部生物環境科学科教授

（企画振興部）小松次長

（総合政策課）清水課長、坂本政策監、須藤チームリーダー

（試験研究機関）

総合食品研究センター：松井主任研究員

健康環境センター：生魚主任研究員

農業試験場：小松企画経営室長、齋藤主査

果樹試験場：高橋部長、中澤主任研究員

畜産試験場：櫻田部長、田中主任研究員、力丸主任研究員

水産振興センター：加藤技師

林業研究研修センター：細谷室長、澤田専門員

産業技術センター：千葉専門員

（所管課）

食のあきた推進課：明石副主幹

保健・疾病対策課：清野課長

農林政策課：赤川主査

地域産業振興課：富樫主査

4 議事

●高田委員長

初めに事務局から議事（１）「秋田県の研究評価制度について」の説明をお願いします。

□清水課長

【資料１により県の研究評価制度の概要について説明】

●高田委員長

ただいまの事務局の御説明について御質問はございませんでしょうか。

続いて、議事（２）「令和７年度に実施した研究課題評価の結果」について、事務局から説明をお願いします。

□坂本政策監

【資料２により令和７年度に実施した研究課題評価の結果について説明】

●高田委員長

続いて、発表課題を２課題、説明していただきます。

まず、中間評価の発表課題について説明をお願いします。

□果樹試験場

【資料３により中間評価『園地更新や新規参入を促す新たな果樹栽培技術に適應する品種の選抜』について説明】

●高田委員長

ただいまの研究課題の説明につきまして、御質問、御意見等ございましたらよろしくをお願いします。

◎中沢委員

イチジクの露地栽培でカミキリムシが取り上げられていましたが、温暖化の影響により害虫の対策等の変化はあるのでしょうか。

□果樹試験場

温暖化の影響により害虫の繁殖サイクルが早まることで、農薬の散布回数が増え、余

計に農薬が必要になる可能性があります。そのため、農薬の効果を持続させるための散布のタイミングなどを指導しております。

◎中沢委員

省力化の観点からはいかがでしょうか。

□果樹試験場

害虫についての省力化の観点からの試験は、まだ実施しておりません。

◎池本委員

ニホンナシのジョイント仕立てに適した品種系統で、3品種は普及性がないため、調査を終了したと説明がありましたが、今後の展望ははいかがでしょうか。

□果樹試験場

適応性が期待できる系統はあるものの、品種化される前には情報を公開することができないため、現段階では期待できる系統はあるということのみご報告させていただきます。

◎大浦委員

園地更新を容易にするため、ニホンナシジョイント仕立てに適した品種を選抜しているとのことでしたが、ジョイントすることで園地更新にどのようなメリットがあるのでしょうか。

□果樹試験場

ジョイントすることにより、樹が互いに助け合うことで、本来であれば弱っていた個体が、他からエネルギーを得ることで均等に生育することが可能になります。また、他県のデータではジョイントすることで早期に収穫できるようになり、収量も拡大したという報告があります。

◎大浦委員

ジョイント仕立ては樹がつながっているため、更新する際には一気に更新する必要があることから、栽培方法に適した品種選定は意義のあることだと考えます。

また、研究の性質上成果が出るまで時間がかかると思います。品種にもよるとは思いますが、一般的に研究の成果が出るまでどのくらいかかるのでしょうか。

□果樹試験場

苗木から育てる場合、ブドウやモモは比較的早いのですが、7年程度かかります。若木では本来の品質の果実が収穫できないため、研究の結果が出るまで一定の期間を要します。接ぎ木をすることで期間が短縮できる場合もありますが、今回の研究は苗木からの研究となるため、どうしても10年程度の期間が必要になります。

◎寺境委員

温暖化の影響で栽培環境が変わってくるなか、高温耐性のある品種の選抜などは行われているのでしょうか。

□果樹試験場

高温耐性のある品種選抜は、りんごでは行っています。ニホンナシやブドウは秋田ではこれまで気温が足りないといわれていましたが、暖かくなり、適産地となってきており、現段階では高温耐性のある品種選抜は行っておりません。

◎寺境委員

静岡県では温暖化の気温変動にも対応できるよう、アボカド栽培に取り組んでいるという報道がありましたが、秋田ではニホンナシやブドウは温暖化で収量の増加が期待できるといえることですね。

この研究は、園地更新や新規参入しやすい栽培方法に合った品種を選抜するというもので、生産者視点からのアプローチだと考えますが、市場の消費者ニーズからの観点はあるのでしょうか。

□果樹試験場

品種の選抜にあたっては、食味が悪いものは落としていく必要があります。シャインマスカットは食味が良く市場ニーズが高い品種ですが、これは一文字短梢仕立てが栽培方法として適しています。このような品種を選抜する予定です。

◎寺境委員

ニホンナシにおいても市場ニーズが高い品種で、ジョイント仕立てに適した品種が見つかり、消費者と生産者双方の利益につながると考えました。

◎宮田委員

ニホンナシジョイント仕立てでは作業時間が40%削減、ブドウ一文字短梢仕立てでは25%削減できると具体的な数値が示されており、大変わかりやすかったのですが、

例えば自家和合性品種導入によりどの程度作業時間の減少が期待できるのかなど、他の取組では具体的な数値はあるのでしょうか。

果樹試験場

作業を計測することで、作業時間を試算することは可能と考えますが、現段階では計測は行っておりません。

◎ 宮田委員

省力化や効率化の程度を具体的に示せるとわかりやすいと思いますので、今後のとりまとめの過程で試算されることを検討いただければと思います。

● 高田委員長

今回の研究は他地域で実施されている栽培方法を本県に導入することで、現在の秋田の栽培システムを変えて作業の効率化を図るという趣旨でよろしいでしょうか。

果樹試験場

そのとおりです。

● 高田委員長

この栽培方法を秋田に導入した際のデメリットやそれを解消するための対応方法などが、現段階であれば紹介いただけますでしょうか。

果樹試験場

本県は生育期間が短いため、ジョイントの育成苗が思うように成長しない可能性があります。

● 高田委員長

この評価は中間評価で、この後も研究が続くと思いますが、実際に生産者に研究成果をフィードバックする際には、メリットだけではなく、想定されない問題が発生することも想定されるため、その点も注意しながら進めていただければと思います。

また、適応性の高い品種の選抜に向けて研究されているとのことでしたが、適応性の有無はどのような観点で判断されるのでしょうか。

果樹試験場

適応性の判断基準は樹種によって異なりますが、例えばモモは、果実障害が無い品種、

一定の収量が確保できること、作業の省力性が確保できていることなどにより適応性を判断しています。

●高田委員長

先ほど寺境委員から、多収量が確保できるという方向性と、少量でもマーケットニーズが高くて高単価で販売できるという方向性もあるとのご指摘がありましたが、適応性を判断するには質と量を両にらみでとっていただくと、秋田県の選択肢が広がると考えました。

続きまして、事後評価の発表課題について説明をお願いします。

□畜産試験場

【資料3により、事後評価『比内地鶏の肉質及びおいしさの日齢変化に関する研究』について説明】

●高田委員長

それではこの課題に関する御質問、御意見等をお願いします。

◎安藤委員

肉質の評価は味や香りの他に、硬いか柔らかいかの食感の要素も大きな影響を与えます。最近の比内地鶏は柔らかくなったという声もある一方で、依然硬いと感じる方もいらっしゃいます。近年消費者は柔らかい肉を好む傾向があるなか、この硬さや柔らかさをどのように評価されたのでしょうか。

また、名古屋コーチンなどの他の地鶏と比較して官能評価すると、どのような結果になるのでしょうか。

□畜産試験場

官能評価では、味・香り・食感の観点から評価しており、比内地鶏のもも肉に対する評価としては、筋っぽい、弾力がある、しっかり、歯ごたえがある、肉が締まっているといった言葉が選ばれています。今回の研究は比内地鶏の日齢変化を明らかにするものですが、日齢では大きな変化はなかったものの、ブロイラーなどの他品種と比べると差異がありました。比内地鶏は改良が進んでおり、同じ日齢であれば以前よりも体重が増え、肉質も柔らかくなってきている印象はあるものの、他品種よりも飼育日数が長いため、他品種並みに柔らかくすることは難しいと考えています。

また、地鶏と認められる基準の一つに飼育期間が75日以上というものがあり、75日や100日で出荷されている地鶏もある中、比内地鶏は飼育期間が150日以上であること

から、他の地鶏よりは硬くなる傾向にあります。ただし、調理方法によって、比内地鶏の硬さも変わるため、いかに比内地鶏のおいしさを引き出すかという観点も必要と考えます。

◎池本委員

比内地鶏の肉質が硬いのは、飼育期間もありますが、平飼いで飼育していることも影響しています。柔らかくすることを目指すのであれば、ケージに閉じ込めて育てると柔らかくはなりますが、比内地鶏にとってはよい生育環境にはなりません。

そのため、肉質が硬いことを当たり前のこととして、硬い肉を好む層に売り込んでいく方法や、串刺しや煮込むなど硬い鶏肉に適した調理方法をPRしていただければよいのではないかと思います。

また、今回は飼育日数に関する研究で、研究の目的は達成されていると考えますが、飼料によりどのように肉質が変化するのかといった研究はなされているのでしょうか。

□畜産試験場

過去に研究を実施していますが、餌が歯ごたえに大きな影響を与えるという結果は出ておりません。飼料にコメを添加することで味が変化するという研究などはありますが、歯ごたえは飼育期間や飼育環境の影響が大きくなっております。

◎青山委員

比内地鶏の飼育基準に飼育方法として平飼い又は放し飼いとありますが、この違いは何でしょうか。

□畜産試験場

平飼いは鶏をケージに閉じ込めるのではなく、パイプハウスなどの建物内で自由に歩き回れる状態で飼育することです。放し飼いはこれに加えて屋外の運動スペースがついています。現状は鳥インフルエンザの影響で、外に放すことなく平飼いで飼育されることが一般的です。

◎青山委員

飼育方法で平飼いまたは放し飼いにしていることが、比内地鶏のおいしさにつながっている部分もあるのかと思いました。

また、点灯管理の有無が発育に与える影響を調査され、点灯ありの方が早く成長するとのことでしたが、夜間に照明を点灯することは鶏からするとストレスにつながるのではないかと捉えており、今後比内地鶏を世界に売り出していく際に、SDGsや動物愛

護の観点から点灯管理の必要性や妥当性について検討する必要があるのではないかと考えました。

□畜産試験場

アニマルウェルフェアの考え方が世界中で進んでいるなか、現在は一般的な点灯管理ではない方法も検討する必要があるのかと思います。また、今回は卵を産んでいる鶏と産んでいない鶏の官能評価も実施しましたが、有意な差は生じませんでした。

◎宮田委員

資料内に、点灯管理技術により、高品質な比内地鶏を安定的に提供するとありますが、点灯管理によって味に差が生じないのであれば、何を狙って点灯管理するのでしょうか。

□畜産試験場

鶏は集団で飼育するため、生育にばらつきがあり均一化が難しいのですが、点灯管理により、ばらつきが少なくなり肉質の均一化を図ることができるようになります。

◎宮田委員

点灯なしデータと点灯ありデータを比較すると、日齢が160日に達すると、それほど差が無いように見えます。この研究によって、点灯なしでも一定日数に達すると差が少なくなるというデータが得られていると思いますので、生産者にフィードバックできる貴重な情報なのではないかと考えます。

◎大浦委員

時間をかけてのびのびと育成しているところをアピールできれば、他品種との差別化につながると考えます。

飼育期間が150日以上で、半年近くに及ぶとのことですが、出荷体制はどのようになっているのでしょうか。

□畜産試験場

生産者は1年を通じて出荷できる体制としております。比内地鶏は秋から冬にかけての需要が高まるため、その時期に出荷される鶏が多くなります。

◎大浦委員

先ほど比内地鶏の調理方法が話題になりましたが、出荷時期によって肉質が変化するのであれば、季節に合わせた調理方法を提案するという方法もあり得るのではないかと

考えました。

また、温暖化の影響で鶏の飼育に影響が生じているのではと思いますが、どのように対応しているのでしょうか。

□畜産試験場

鶏は汗腺がないため汗をかかず、暑さに弱いため、猛暑によって死ぬことがあり、県としても暑熱対策の試験を行っております。結果が出たものは生産者に技術を普及してまいります。

●高田委員長

本研究課題の内部評価で、効果はB判定とのことでしたが、研究の目的がコスト削減ではないため、設定した課題に対してはA判定でも良いのではないかと感じました。

また、官能評価を行った集団の人数やジェンダー構成はどのようになっていますか。

□畜産試験場

官能評価は大きく分けて、訓練された方が行う官能評価と一般の方々の官能評価の2つに分かれております。今回は一般消費者をイメージし、訓練されていない畜産試験場の職員による官能評価を行いました。人数は40人弱、男性も女性もおり、年齢も20代から70代まで幅広く評価を行いました。

●高田委員長

発表課題に対する質問は以上にしたいと思います。

ここで、そのほか発表課題以外の課題について、あるいは評価結果全体について御意見、御質問等がございますか。

◎安藤委員

中間評価の農業試験場が実施した「あきたの米ぢからを強化する銘柄米の開発」や「秋田の夏秋期の生産力を引き出す野菜栽培技術の開発」などについても個別の意見もあるのですが、温暖化に対応した高温耐性のある品種の選抜は必要になってくると思いますので、各研究機関においても取り組んでいただきたいと思います。

また、「高密度播種苗による良食味米品種の省力安定生産技術の確立」については、私たちも農業生産法人を運営しており、去年一昨年と高温によりあきたこまちの収量が減少しております。こうした中で、あきたこまちが今後も県の主力品種としてふさわしいのかという点も含めて研究いただければと思います。

最後に「秋田の夏秋期の生産力を引き出す野菜栽培技術の開発」の中でさつまいもが

新規品目の可能性を検討されているとのことですが、数年前から北海道ではさつまいもの生産が盛んになっており、国内でのスイーツ需要や端境期における海外輸出も検討できるとのことでしたので、是非さつまいもの研究を続けていただければと思います。

●高田委員長

今回の発言は、特定の研究機関に向けたものではなく、公設試験研究所全体へのご要望ということでお話しいただきました。

そのほか御意見、御質問等はございますか。

◎中沢委員

中間評価の農業試験場が実施した「あきたの米ぢからを強化する銘柄米の開発」について、酒造好適米の「百田」と「一穂積」の需要が伸び悩んでいるとの記載がありましたが、これを使った日本酒が県内の品評会で金賞を取るなどの評価を受けているため、これをもっとアピールしてはどうでしょうか。

□農業試験場

「百田」と「一穂積」は新しい特性を持つ酒米としてデビューさせましたが、コロナ禍と時期が重なり、思うようにPRができず需要が伸び悩んでいるものと考えております。ただ、「百田」と「一穂積」のポテンシャルを理解いただいている酒蔵もありますので、総合食品研究センターと協力して取り組んでまいります。

●高田委員長

先ほど安藤委員からもご発言がありましたが、これまでの30年とこれからの30年で環境が大きく変わると思います。それに伴い、既に設定されているテーマの中身も変わってくるため、評価制度を所管している企画振興部に要望しますが、試験研究の設計や共同研究について、柔軟な対応をお願いします。また、公設試験研究所の皆さんも、今までの守備範囲を超えても必要な研究を行っていくことが重要だと考えます。

これは、1年や2年で実現できるものではないと思いますが、これまで積み重ねてきた知見が、今後どのように生かされるかにかかってくるものと考えます。

それでは、評価の妥当性の確認に入ります。それぞれの課題について御指摘や御意見はありましたが、県の自己評価のチェックという観点からは評価結果について異論はなかったと判断しましたので、事務局から報告があった、令和7年度研究評価結果については妥当であるということによろしいでしょうか。

【委員一同異議なし】

●高田委員長

それでは、令和7年度の研究評価結果について承認をいたします。

本日より予定されている議題は以上ですが、その他皆様から何かございますか。

特にないようですので、議事はこれで終了いたします。皆様ありがとうございました。

なお、本委員会の内容は、会議録案作成後に、各委員に確認をしていただきます。よろしくお願ひします。事務局にお返しします。

□事務局

それでは以上をもちまして、令和7年度秋田県政策評価委員会研究評価専門委員会を閉会いたします。御審議いただきありがとうございました。